

# 学生卒業設計制作NCF空間ディスプレイアワード受賞作品

2025年  
最優秀賞

区分

Ⅱ. 生活ディスプレイデザイン

フリガナ

フクタ ハワ

制作者名

福田 羽和

フリガナ

ダイドウダイガク コウガクブ ケンチクガクカ

卒業時の大学  
学部・学科

大同大学工学部建築学科

フリガナ

フナシ ニナ

職名

船橋 仁奈

教授

ワレハカクチョウスル、ユエニワレワレハアル

作品名

我は拡張する、故に我々は在る

概要



## 01.はじめに

現在では個人が社会と直接接続できるようになったが、学校や職場、家族などの帰属集団自体には大きな変化がみられず、その結果社会とのつながり方はあまり変わっていない。学校へ行く、職場へ行くといった生活行為そのものが社会とのつながりなのではなく、**個人が社会とつながるためのプロセスこそ、個人と社会のつながりの本質である**といえるのではないかと。

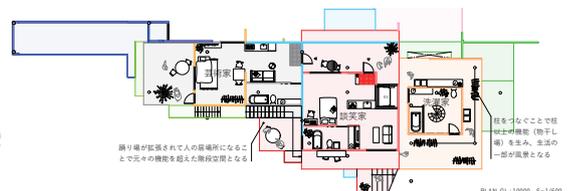
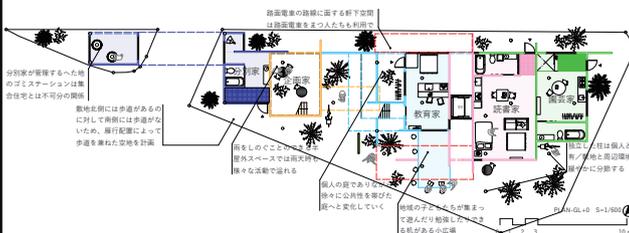


## 02.自分らしいつながり方

本設計では、集合住宅における「**個人と社会のあいだ**」すなわち「**集まって住む**」ことによりまれる「**共有部**」に着目し、**新たな個人と社会の在り方**を示す。住民たちは、気が付かないうちに少しずつ小さな社会に貢献し、社会とのつながり方を知るのである。そして様々な共有部を通じ、今よりも多様で自分らしい社会とのつながり方を選択することができるようになる。

## 03.公共減歩の引用

本建築を設計するにあたって、「**共有減歩**」の考えを引用する。集合住宅の**専有部を拡張し、少しずつ個人の領域を出し合うことで共有部を形成**していく。共有減歩とは、事業に必要な土地を、区画内の所有者が公平に出し合うことで、道路や公園などの公共用地を確保・充実させる仕組みである。共有部をつくるための「**専有部の提供**」という行為は、集合住宅という社会への貢献でもある。この時点で既に、**新たな個人と社会の関係値**が生まれている。



|      |                |
|------|----------------|
| 制作者名 | 福田 羽和          |
| 作品名  | 我々拡張する、故に我々は在る |

【コンセプト解説】

04.〇〇家としての住まい

この集合住宅には〇〇家が暮らしている。〇〇家という言葉は、建築士と建築家が違うよう、〇〇士は資格の有無を指すのに対し、〇〇家は自分自身の生き方を指す。住民はある〇〇家として自分自身に合った空間の住居を選び、**社会とつながる場として利用したり、異なる空間的特徴を読み解きながら、社会とつながる方法を模索し** 〇〇家として社会と関わることができる。

14人の生き方が反映された共有部は、**集合住宅全体に反映するもの、地域の人を巻き込むもの、収入につながるもの、自己表現をするもの**など様々である。

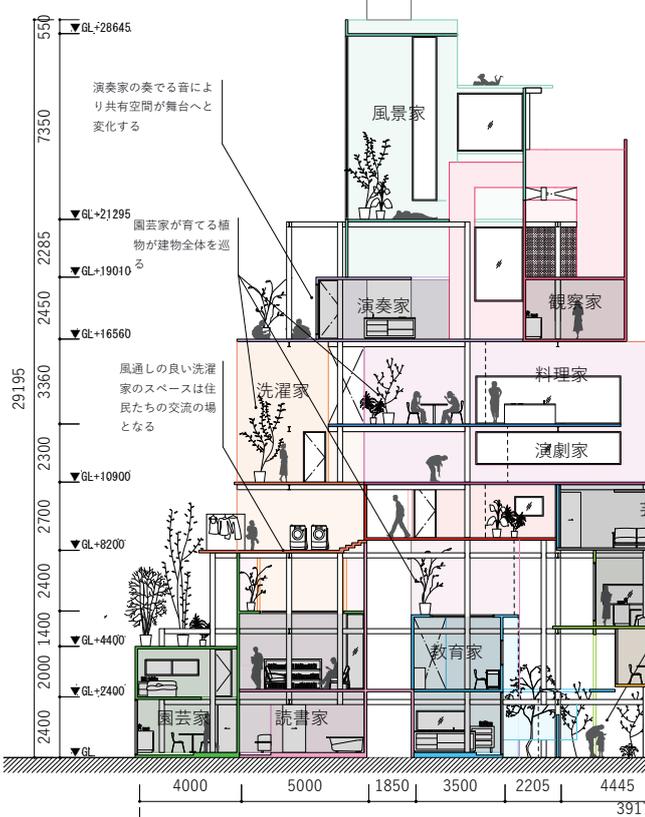


|   |   |  |   |
|---|---|--|---|
| <p><b>園芸家</b></p> <p>共有部が庭のような外部空間をもつ。個人の庭であると同時に建物全体の庭にもなっている。</p>               | <p><b>教育家</b></p> <p>複数の形態の共有部をもつため、教育ニーズに合った利用が可能。講座教室が置かれ、小さな経済を生む。</p>             | <p><b>読書家</b></p> <p>本のための共有部とした私設図書庫。エレベーターから近く、コンラフラスとしての役割も果たしており、近隣住民も利用できる。</p> | <p><b>分別家</b></p> <p>へた地をゴト拾って場として管理している。ばさばさ分別し、リサイクルすることで収入を得て生活する職場併設型の住居。</p>           |
| <p><b>企画家</b></p> <p>1Fの半屋外空間でイベントを企画運営する。異形形式をとっており、複数階に渡って住民との関わりをもつ。</p>       | <p><b>子育て家</b></p> <p>他の住居に比べ複数の住居に接している。隣人たたと接しやすくなり室もつことができ、子どもが多くの子びを得ることが出来る。</p> | <p><b>談笑家</b></p> <p>広場のような共有部は、屋外テラスのようになっている。集まることに適した空間的特徴をもつ。</p>                | <p><b>演劇家</b></p> <p>大開口部がありプライベート感が低い住居。窓大穴を築るために設けられる、見る見られる関係性が生まれるため日常生活の場が劇場化している。</p> |
| <p><b>洗濯家</b></p> <p>この場所は多方面からの風通しがよく、どの時間帯でも洗濯物がよく乾く。住居全体のランドリースペースとして機能する。</p> | <p><b>料理家</b></p> <p>屋外キッチン併設型の住居。料理を教える場として使ったり、料理を振る舞う場として使っている。</p>                | <p><b>風景家</b></p> <p>最上階の共有部はビル全体の植栽場となり、窓大穴を築るために設けられる、建物全体のハレの日を演出する。</p>          | <p><b>観劇家</b></p> <p>多様な窓をもつ住居。隣物の管見人が住んでおり、いろいろなことを観察している。</p>                             |
| <p><b>芸術家</b></p> <p>アトリエ併設型住居。屋上層を共有部としており、芸術活動をする場としている。</p>                    | <p><b>演奏家</b></p> <p>ステージ併設型の住居。演奏家の人は誰かに聞いてもらいたくよくピアノを室内から引渡し演奏している。</p>             | <p><b>洗滌家</b></p> <p>洗濯機を共有部としており、洗濯物を干す場としている。</p>                                  | <p><b>観察家</b></p> <p>多様な窓をもつ住居。隣物の管見人が住んでおり、いろいろなことを観察している。</p>                             |



05.新たな共有部の在り方

私は本研究を通して、**集合住宅における新たな共有部の在り方**を示した。個人がより尊重されるようになった今、個人と社会とのつながり方も変わりゆく時なのではないかと思う。そしてなにより本建築は、従来の集合住宅の型から離れ、個人の在り方や住まい方を問い直す問題提起でもある。**社会とのつながり方そのものの可能性が拡張**することを示唆するような、共有部の在り方を提案する。この建築を通して、誰もが今よりも楽で簡単に、自分らしく住まうことができるような社会をつくっていききたい。



各住居の共有部が重なり住居以外にも利用できる多様な軒下空間が生まれる

室内に表れた梁はインテリアの一部として活用される

色を重ねて領域を認識する

西側は垂直方向の絡み強い

各住居の共有部が重なり住居以外にも利用できる多様な軒下空間が生まれる

色を重ねて領域を認識する

西側は垂直方向の絡み強い

各住居面積(専有面積/共有面積)

|   |   |
|---|---|
| 56.3 m <sup>2</sup> / 13.0 m <sup>2</sup> | 56.3 m <sup>2</sup> / 13.0 m <sup>2</sup> |
| 60.7 m <sup>2</sup> / 19.5 m <sup>2</sup> | 60.7 m <sup>2</sup> / 19.5 m <sup>2</sup> |
| 42.1 m <sup>2</sup> / 54.5 m <sup>2</sup> | 42.1 m <sup>2</sup> / 54.5 m <sup>2</sup> |
| 36.0 m <sup>2</sup> / 70.4 m <sup>2</sup> | 36.0 m <sup>2</sup> / 70.4 m <sup>2</sup> |
| 50.6 m <sup>2</sup> / 70.4 m <sup>2</sup> | 50.6 m <sup>2</sup> / 70.4 m <sup>2</sup> |
| 36.4 m <sup>2</sup> / 23.5 m <sup>2</sup> | 36.4 m <sup>2</sup> / 23.5 m <sup>2</sup> |
| 22.5 m <sup>2</sup> / 13.8 m <sup>2</sup> | 22.5 m <sup>2</sup> / 13.8 m <sup>2</sup> |

建築情報

- 敷地面積 / 380.684 m<sup>2</sup>
- 建築面積 114.803 m<sup>2</sup> < 304.547 m<sup>2</sup>
- 延べ床面積 650.2 m<sup>2</sup> < 761.368 m<sup>2</sup>
- 容積率 200%
- 建蔽率 80%
- 近隣商業地域